

令和 2 年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4090100308		
法人名	株式会社 EPO		
事業所名	グループホームえん さくらユニット		
所在地	福岡県北九州市門司区田野浦二丁目9番33号		
自己評価作成日	令和2年8月17日	評価結果確定日	令和2年10月14日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートウリずん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和2年9月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・多機能ホームえんとして、小規模多機能型事業所と共に地域に根ざした施設となれるように努力している。運営推進会議で、自治会や地域包括との意見交換を行いながら形作りを進めている。 ・今年に入りコロナウィルスの影響で外出もままならないため、施設内でのレクレーションを楽しんでいただけるように職員が協力して行っている。毎月の調理レクやちょっとした運動レクなど提供し、不慣れな職員にもアドバイスし笑い声の絶えない施設となっている。 ・また、看取りケアについても現在2名の方を対象に支援させていただいている。ご本人はもちろん、ご家族の意向に沿い細目な連絡や声掛けを行い安心して生活していただけるように努めている。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>「多機能ホームえん」の居住系サービスとして、運営方針に掲げた「その人らしく生きていける上質で適切なサービスの確立」の具現化に取り組んでいる。入居当初入浴を拒否していた方が本人の意思を尊重する対応で、入浴後は「ありがとう」と感謝され、「今日は風呂はないのか」などと話されるまでになったり、夜間無断外出し保護された入居者に「お帰り」と声をかけ、「ここにいる良い」と納得できる支援を実践している。ホームで最期をと7月に退院された方は、かかりつけ医や訪問看護との連携で、褥瘡が治癒し、時には食卓で食事ができるまでになっている。「多機能ホームえん」として運営推進会議や研修が開催され、法人代表者から理念の「介護の仕事に夢とプライドを」の講話を受ける機会も多く、多様なサービスを提供している法人内の異動や個々の状況に応じたシフトで、コロナ禍の中職員が丸丸となって地域に密着したサービスを展開している。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット/
事業所名 さくらユニット/グループホームえん

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	介護士の仕事にそれぞれの思いでついているが、ご利用者本位の支援について話したり、研修を続け実践していくことで事業所の理念に向かおうとしている。	「多機能ホームえん」の会議で法人代表者から理念の「介護の仕事に夢とプライドを」の講話を受け、ホーム会議などで運営方針の「その人らしく生きていける上質で適切なサービスの確立」を話し合っている。	その場に応じた具体的な事例を通じた話し合いで、さらなる方針の具現化を期待します。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に入り、地域の行事への協力や参加で繋がりを持っている。災害時には、双方での協力が出来る様に運営推進会議などでも話し合ったりしている。	小規模事業所とホームの総称「多機能ホームえん」は、コロナ禍で中断している地域との交流を模索中である。先日の台風時避難途中の方から安否を気遣う声かけがあるなど、地域に中に溶け込んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	介護相談は随時行っており、支援が必要となったときの手助けを続けている。また、認知症の施設内研修の内容などを運営推進会議に添付し理解を得られるように努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議が開催できない間は報告書を作成し、ご利用者の生活状況などを写真や季刊誌を添付して知らせた。今回は久しぶりに運営推進会議を開催、ご利用者の参加もあり30分と時間制限他感染対策を行った中で開いた。皆さんの困りごとなども話し合うことができた。	運営推進会議は7月は30分、9月は1時間内の開催であった。入居者や自治会長、以前自治会長であった地域住民などの参加があり、議事録はホーム入口で公表している。豪雨時は「水害のアナウンスが聞こえない」との意見や、台風の時は避難先の事が話題になった。	運営推進会議設置目的に勘案し、定期的に発行されている「明星新聞」に運営会議の日時の案内や会議内容報告などを掲載するなどの工夫で、家族の参加を期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	アンケート調査やこのコロナウィルス関係の情報や状況などは常に意識し、協力している。わからないことについてはその都度、指導していただくようにしている。	毎月FAXしている居室情報は市のホームページに掲載されている。コロナ禍の中、保険者と情報交換しながら、適切な感染防止に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施設を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束委員会を開催し、各事業所の身体拘束に対する動向の把握に努めている。その中で課題を見つけ、解決するための研修や指導を行っている。常に課題となっているスピーチロックについては、繰り返し研修を行っている。	夜間無断外出し保護された入居者の心情に配慮し、「お帰り」と声をかけている。ユニット間や1階の行き来を支援したり、日中の活動で入眠剤の服用がなくなった入居者もあり、普通の生活を支援している。「待つ」や「だめ」ではなく、適切な声かけを学ぶために事例を通じた研修を継続している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束委員会の中で虐待についても触れ、研修も、多機能ホーム全体研修とグループホームで研修を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	今年は研修などの参加はできなかったが、施設にはパンフレットなどを用意し必要時に説明ができるように準備している。	日常生活自立支援事業や成年後見制度に関する資料を整備し、状況に応じて紹介している。訪問調査日、民間団体の後見人同行で受診された入居者は、行事にも参加される後見人に深い信頼を寄せていると管理者は話している。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は重要事項説明書他、契約書はゆっくり読み上げ、分かり易い言葉で説明している。その中で分からない事や不安に感じる事など無いように努めている。また、変更などあった場合はその都度、変更内容をお知らせして同意を得るようにしている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を設けているが、意見が入っていることはない。しかし、直接管理者や職員に要望や意見などを言っていたい。意見箱がもう少し生かせるように検討したい。	各入居者の状況は随時連絡し、年4回発行している明星新聞に調理レクリエーションでの真剣な眼差しや笑顔満載のスナップを掲載し、意見の表出を促している。7月から階下の交流室で、家族の人数や時間を制限した面会が開始されている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員からの意見は日ごろの業務の中でも多く聞くことができている。常勤の職員から非常勤の職員まで意見が出しやすい環境作りが出来ていると思う。	法人全体の経営会議、職員会議、グループホーム独自のフロア会議が定期的開催され、職員の意見等を反映するシステムが構築されている。管理者が職員に個別に意見を聞く機会を設けたり、会議内容は連絡帳で欠席者に周知されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課システムを活用し、個々人に目標を立ててもらっている。目標達成やスキルアップのための研修などの参加に対して積極的に支援している。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	職員の採用に当たっては、年齢や性別による排除などは行っていない。それぞれの事情にあった勤務体制を整え、無理なく職務につけるようにしている。また、職員の個性や得意分野が発揮できるような場面作りをすることで仕事への意欲が高まるようにしている。	口コミでの入職も多く、28歳～63歳までの資格、年齢や経験の異なる男女の職員が就労している。法人内の異動があり、介護現場で勉強したいと自ら異動を希望した職員もある。'午前午後其々短時間勤務する近隣在住の職員や、コロナ禍の中での子育てで土日しか勤務できなくなった男性職員、プロスポーツの試合の合間に勤務する男性職員などと多彩で、個々の状況に応じたシフトで能力を発揮している。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	日ごろから差別などのない環境作りに関心しているが、今年度は研修などはまだ行っていない。	12月の人権週間のポスターを毎年入口に掲示している。「多機能ホームえん」として、事例を通じた虐待防止に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	介護経験や一人ひとりの力量を見極めながら、個別に指導したり、理解しやすい言葉で説明している。内部研修においては、実際に起こる例を取り上げ実践に活かせるようにしている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	コロナウイルスの影響で交流会は開催できていない。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	新規入居時に面会などできず、ご本人と話すことができなかったがご家族とは何度も連絡を取り合い、ご本人が困っているであろう事などを理解するように努めた。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面談だけでなく、メールなどでもやり取りをすることで意見などがいつでも相談できるようにした。面談では、遠慮なく意見が言える雰囲気を作り不安要素を少しでも払拭できるように心がけている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事業所間の連携や多職種との交流を図りながら、情報を広げるようにしている。他のサービスも考慮しご利用者に必要な支援ができるようにしている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日ごろの関わりの中で「教えていただけますか」とご利用者に指導していただいたり、知恵をお借りしたりしている。調理などでは味付けや、段取りなどをうかがって一緒に楽しむようにしている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナウイルスの影響で面会や外出などが思うようにできないが、ご本人の様子を伝えたり電話で話し、声をかけて元気付けていただいたりしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナウイルスが落ち着いた暁には、また地域の行事に参加したり思い出の場所に出かけたりしたいと思っている。	前回まで階下の小規模事業所と合同で行っていた敬老会もホームだけで開催したが、小規模サービス利用者が入居している伴侶に会えるように支援している。手紙の返信を支援したり、携帯電話のビデオ通話で家族との会話を支援したり、7月から人数や時間、場所の制限を設けながらも、家族との関係継続を支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	皆様、ほとんど居室から出て他の方とテレビを見たり、レクレーションに参加されたりして過ごされている。ご自分の意志で居室に戻り休まれる方もいるが、一人で孤立している方などはない。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去されたご家族が、今の状況を心配され連絡して下さることがあった。また、時候のご挨拶のはがきなどをいただいている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	思いを聞き取ることが困難になったご利用者も多く、ご家族からの意見やこれまでの関わり中から職員間で話し合い把握するように努めている。日ごろの生活の中でも選ぶ、ご本人に決めていただくなどの場面を持つようにしている。	階下の小規模事業所からの入居も多く、得た情報を活かしながら、意向や思いの把握に努めている。夕方になると「家に帰りたい」とそわそわする入居者の言動の背後にある「ここにおいて良いのか」との思いを全職員で共有している。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時の聞き取りをなるべく詳細に行い、これまでの暮らしぶりなどを把握し、これからの生活にも反映するようにしている。また、ご家族やこれまでのサービス提供者からの助言や意見を参考に経過の把握を行うようにしている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ご本人ができることに視点をおき、有する力の把握と維持に努めている。日々気づいたことは声に出し職員間で情報を交換している。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月のモニタリングとプラン変更時などのカンファレンスの実施を行っている。また、日常生活の中での気づきなどは随時話し合い、プランに活かしている。ご家族には電話やメールで意見を伺ったりしている。	入居者の心身の状況やケアをモニタリングしながら、現状に沿ったケアを支援している。「何か役に立ちたい」と話す入居者の意向を介護計画に明記し、食器洗いや洗濯物たたみをお願いしている。	自立や介助などの表記で現状のケア内容をチェックしたり、チェックした日付の印字の色を変えるなどの工夫で、モニタリングを容易にし、現状に即した具体的な介護計画の作成を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日のケース記録の必要性などはフロア会議でも話し、ケース記録から支援経過の取り込みも行っている。情報については申し送りノートを利用しての伝達や一日2回の申し送りで共有出来るようにしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	経営会議や職員会議などで他事業所からの情報を聞いたり、意見交換を行い、新しい情報を得ている。常に頭の中を柔軟にし、ご利用者本位のサービス提供に心掛けている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議などを活かし地域との関わりを持っているが、今は様々な資源の活用が難しい。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医はご本人が以前からかかりつけの病院に定期的に受診されている方もいれば、施設に往診して下さる先生を主治医にされている方もいる。往診の先生も3名おられ、複数人ずつ担当されている。	3ヶ所の協力医療機関と提携し、往診時に状況を報告して適切な医療受診につなげている。訪問看護師が週1回来訪し、相談できる体制づくりをしている。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護師が各ユニットに週に1回訪問してくれている。日々の状態報告にバイタル測定や爪切りなど行っていただく。必要に応じて、処置や採血なども行っている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時ともにご家族にはわからない生活状況などを細かく伝えている。カンファレンスの参加や必要品などを持っていったりして、入院中のご本人の様子などを聞いたりしている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時には、重度化や看取りについての説明を行い、ご本人やご家族のその時点での意向を伺っている。「まだ、分からない」と言われるご家族もおられ、終末期には改めてご本人とご家族に説明し意向を確認、終末期支援をおこなっている。	整備した方針に沿って意向確認書を取り交わしているが、終末期の宣告から1年以上経過している方もある。ホームで最期をと7月に退院された方は、かかりつけ医や訪問看護との連携で、経口摂取やシャワー浴を試み、現在は点滴がなくなり褥瘡が治癒し、時には食卓で食事ができるまでになっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルを作成し、スタッフルームにすぐに見ることができるようにしている。応急手当や初期対応など日ごろの場面でも、何度も説明し、対応できるようにしている。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	併設施設と合同で避難訓練を年2回以上行うようにしている。訓練は近々が2回とも雨で外までの誘導が出来なかったこともあり、別日に非常階段からの避難を再度計画している。水害については垂直避難するほうが安全との事で周知している。	3月は消防署から通報システムの点検を受け、近日中に非常階段から車イス利用者の避難訓練を予定している。運営推進会議で地元消防団への協力をお願いし、避難場所として施設の活用を申し出ている。飲料水などの備蓄一覧表を掲示し、入居者の緊急連絡先や保険証などを持ち出す予定である。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	数々の事例を元に分かり易く、すぐに実践できるような研修をしている。職員一人一人がご利用者の尊厳を意識し声掛けすることで、言葉が優しくなり、介助の様子にも変化が出てきている。	美容師のお弟子さんから「先生」と呼ばれる入居者もあるが、職員は氏名で呼称している。入居者との関わりはコミュニケーションが重要と穏やかな声かけで、自己選択や決定を促している。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日ごろの会話の中で何かとご本人の思いやしたい事、気になることなど話すようにしている。職員からも「…さん、こんな事言っていましたよ」とご利用者の思いをくみ取り、実現できるように意見を出してくれている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務の見直し等行う中で、まずはご利用者にとってどうなのか。私たちの都合を押し付けているのではないかという点をしっかり話しあっている。ご利用者、おひとりお一人に目を向け、その方の個性や考えかたを理解して、なるべく希望に添えるように心がけている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎朝のモーニングケアで介助の必用な方に髪をとかししたり、清拭したりはしても洋服が上のほうに引きつっていたりズボンが曲がっていたりと細かな点まで気遣いのないときがある。洋服を着かえる時は季節や、その方の好みを反映できるように職員間で注意している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	コロナウイルスの影響で自粛の中、毎月の調理レクで日頃あまり食べないものや、食べたいものなどを一緒に作り楽しんでいる。食材を洗い、包丁で切ったりと準備段階から楽しんで行っている。	階下の厨房で調理された食事を咀嚼や嚥下状態に応じて提供している。毎月の調理レクリエーションは入居者や職員の楽しみとなっている。餃子づくりの記憶がよみがえり、ぎこちない手つきが慣れた手つきになったり、男子厨房に立つは家族の驚嘆になっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は施設内で栄養バランスの取れたものを作ってもらっている。上がってきた食事はご利用者に合わせ、刻みやミキサー食等に提供している。水分で誤嚥のリスクが高い方にはトロミや麦茶ゼリーで提供し水分確保に努めている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを行い、ご自分でできる方には声掛け準備をするようにしている。また、数人の方は訪問歯科を利用され、残存歯の維持や口腔内の保清の指示を受けている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	ご利用者にあったパットや紙パンツを選び、トイレでの排泄を続けられるように支援している。中には夜間は良眠を図るために紙パンツを利用し、日中は布パンツに変更したりとその方に合った排泄を常に考慮し支援している。	トイレと表示された車イスの使用が容易な広いトイレが、2ヶ所設置されている。入居当初前止めオムツだった入居者が、自ら手すりを持って立ち座位が保持できるまでになり、日中はトイレでの排泄を支援している。ポータブルトイレの使用はない。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々に応じた排便サイクルを掴み、緩下剤の服薬量やタイミングを変えている。また、自然排便に繋げるために水分量の確保や軽運動、腹部マッサージ等を行っている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	新規のご入居者に入浴拒否が続いている方がいらしたが、ご要望や職員との信頼関係の中で今はご自分から「待っとたよ」と楽しみに入浴している。夏場はシャワーを好まれる方とゆっくり湯舟につかる方とその方に合わせ入浴して頂いている。	週2～3回の入浴を支援している。自宅や入院先、入居当初も入浴を拒否していた入居者が、本人の意思を尊重する対応で、今では入浴後は「ありがとう」と感謝されたり、「今日は風呂はないのか」などと話されている。管理者は、「ここにいて良いかな」と本人が納得されたのではと話している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間、ゆっくり休んでいただけるように日中の活動性を高めたり、ストレスなく過ごしていただくことで安心して休んでいただけるように心掛けている。去年から睡眠導入剤を中止した方が複数人いる。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	日頃の状態を主治医に伝え、服薬コントロールをしている。薬に変更があったときは申し送りしと申し送りノートを使い伝達するようにしている。薬局からも処方の際にお知らせがあり、内容などが確認できるようにファイルに閉じている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	外出自粛でドライブなどに出かけることはできないが、施設内でのレクリエーションやことわざ遊びなどで楽しんでいただいている。家事活動では、数人の方が食器拭きや洗濯ものたたみなどをご自分の役割として手伝ってくださっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出は控えているが、車窓からのドライブを数回行った。自粛が解除されたときには、季節の花や買い物、地域の行事など外出を楽しみたいと思っている。	コロナ禍に配慮し、ご当地の観光地までドライブし車窓からの眺めを楽しんでいる。1階玄関前には菜園があり、週2回程度ホーム周辺を散歩することもある。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在お金をご自分で所持されている方は一人しかいないが、そのお金は安心していただくために持っており、ご自分で何か買いたいものを買うことはほとんどない。買い物などで使える機会を設けたいと思っている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙は度々届いている方が数人いるがこちらから出すことはほとんどない。電話は面会ができない分、ご家族と電話で話すことをした。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	生活の場所は常に清潔にし、整理して安全に暮らせるように心掛けている。室温などの空調にも配慮し、心地よく生活していただくようにしている。季節に合わせた絵を飾ったり、作品作りができたときには飾るようにしている。	エレベーターで2階に上がると、正面の事務室の左右に各ユニットが開所している。共有空間に厨房や食卓や椅子が並び、間仕切りに入居者の笑顔のスナップが掲示され、テレビが設置されたコーナーの壁際のソファで仲良く寛ぐ入居者の姿があった。清掃が行き届き、空調も管理されている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアでは、テレビを見たり読書をしたり、うたたねをしたりと様々に過ごされている。ほとんどの方が、日中はフロアで過ごされている中に居室で休まれてはフロアに出てこれ皆さんとお話したりする方など、思い思いに過ごされている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は常に清潔に整理し、安全に過ごせるようにしている。ご本人の好みのものや、使いやすいようにご家族が用意して下さったものを置いて心地良く生活できるようにしている。	コロナ禍に配慮し、居室の訪問はしていないが、廊下から整理整頓された居室が垣間見えた。ベットやクローゼットが備え付けられ、職員が清掃や衣類の交換等を支援しているが、自分で清掃される入居者もあり、居心地良い居室づくりを支援している。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物全体に手摺りを設け、安全に歩行できるようにしている。トイレの手前には張り紙をしてトイレの場所が分かり易く、一人で排泄が済ませられるようにしている。		